

学習院々歌の解

院長 安倍 能成

私は今年の、皇太子様の御誕生日と同じ日の十二月二十三日で、ちょうど満六十八才になる。殿下より精確に五十才上である。私はこれまでに文章は大分書き、和歌も俳句も少しは作ったが、こんな院歌のようなものを作ったのは、生まれて初めてである。詞はまずいけれども、私はこの院歌を、日本国民全体にもうたつてもらいたいくらいの意気込みで、作ったのである。

一 西洋の神話に、フェニックスという鳥があつて、五百年ごとに、もえる火の中で焼け死んで、又生きかえるという。不死鳥というのはその鳥のことで、世界は絶えず生き返り死に返り変つてゆくが、その中に死ぬ生命があるという意味である。「もゆる火の火中ほなか」という文句は、「古事記」という古い本にある弟橘姫おとたちばなひめの御歌から拝借したので、委しいことは先生にきいてもらいたい。戦争で学習院は焼け、敗戦後皇室の御保護を離れて私立学校になつたが、その焼跡の上に、先生と生徒と力を合せて、新しい学習院を作りあげてゆこう。

二 花は、咲くが又色があせて萎むものである。学習院もこの盛衰はのがれにくい。ただ長い歴史の間に養つて来た名誉ある学風と精神とを基にして、わるいことはどしどし改め、広く世界のことを眼の中に入れて、狭く独りよがりにならず、現実(世の中)の醜さや苦しさに負けないで生きぬいてゆこう。

三 日本も世界の三大強国だとか五大強国だとか威張つた時があつた。学習院も校舎も立派で豊かな時もあつたが、昔はよかつた、よかつた、と嘆いて居てはいけない。荒波が狂つても、黒雲がゆくさきを閉しても、みんなの胸に希望のラツパを高く鳴らして、屈せず進め。

四 人はみんな外の人でない命いのち、即ち個性を天から与えられて居り、全く取り柄のない人間はない。頭がわるい、身体が弱いといつて失望せずに、自分の個性を育て鍛えて、めいめい自分の力を養い、さてこの力をみんなして世の為、社会の為に捧げよう。まことと平和とを永久の光り導きと仰いで。

解らぬことは先生方にきいてもらいたい。